



世界遺産特集

ふ だ ら く し ょ う ど

補陀落浄土の世界 那智山



熊野那智大社

くまのなちたいしゃ
熊野那智大社

熊野那智大社は、海岸から約7km離れた那智山の中腹にあり、遠く太平洋上からも見ることができ、^{なちのおおたき}那智大滝に対する原始の自然崇拜を祭祀の起源とする神社で、^{じゅうにしよごんげん}熊野十二所権現とあわせて、^{ひろごんげん}那智大滝を神格化した「飛瀧権現」を祀っています。主神は^{ふすみのおおかみ}熊野夫須美大神で^{しんぶつ}神仏習合の時代には^{せんじゅかんのん}千手観音として崇拝されました。

重要文化財に指定されている社殿は江戸時代に再建されたものですが、谷をはさんで那智大滝を拝することができるように配置された形式は、鎌倉時代以来ほとんど変わっていません。地形の制約によって本宮大社や速玉大社のように横一列にはならず、主な五社殿五棟と残る八社を合祀した細長い社殿がL字状に配置されています。当初、神殿は信仰の起源をなした那智大滝の下にあり、現社地に移動して以来行われている「那智の火祭」は、



那智の火祭り

滝を表す高さ6mの^{おうち}「扇みこし」を^{おおたいまつ}大松明の炎で清める古式ゆかしい祭礼で、大滝への^{しゅつぎょ}出御に先立ち^{でんがく}「那智の田楽」も^{ほうのう}奉納されます。

ひまつ でんがく
那智の火祭り と 那智の田楽

熊野の夏を炎で彩る那智の火祭りは、毎年7月14日に那智大滝の前で繰り広げられます。熊野那智大社の例大祭として別名「扇祭り」と呼ばれるこの祭りは、本社前での^{とぎよ}儀式と渡御道中の火祭り、^{たきのもと}滝本の行事に分かれます。祭りは午前10時頃から大社の神前で始まり、^{さいしゅまい}斎主舞・^{みこまい}巫女舞・^{おたうえしき}大和舞・田楽・御田植式が奉納されます。これらの古風な芸能を伝える田楽は国の重要無形民俗文化財に指定されて高く評価されており、伝承では^{おうえい}応永年間（1394～1428）に京都の田楽法師が伝授したものとされています。午後1時に



那智山青岸渡寺

なると12体の扇立てが行われ、滝本の飛滝神社へたきのもと ひろうと降りていきます。12体の扇御輿おうぎみこしが参道を下っていくと、滝本の「火所」ひどころから移した火を奉じた12本の大松明がこれを迎え、もみ合うようにしながら渡御を行います。

青岸渡寺せいがん と じは、5世紀前半にインドから熊野に漂着した僧が那智大滝に出現した観音菩薩を祀ったことに始まると伝えられています。熊野那智大社

に隣接し、神仏分離令以前は、那智の「如意輪堂」にょいりんどうとして熊野那智大社と一体の寺院として発展してきたもので、神仏習合の形態を良く保っています。本堂は、豊臣秀吉が天正18年（1590）に弟の秀長に命じて再建した木造の壮大な建築で、西国三十三所観音巡礼の第一番札所てんしやうとして、近世には全国から多くの巡礼者が訪れるようになりました。また、本堂の北にある高さ4.3mの宝篋印塔ほうきやういんとうは、鎌倉時代に尼僧が願主となって造ったもので、美術的にも優れた石造物として重要文化財に指定されています。



宝篋印塔

那智大滝なちのおおたきは、那智山の森林を水源とする高さ133m、幅13mの日本一の滝で、熊野那智大社、青岸渡寺の信仰の原点であり、また信仰の対象そのものです。熊野の神々や仏くらいを位や関係がわかるように図示した「熊野曼荼羅」くまのまんだらや、「那智参詣曼荼羅」なちさんけいまんだらにも必ず描かれており、信仰に直接関連する文化的景観の典型となっています。

那智山には4つの溪流があり多くの滝がみられ「那智四十八滝」と呼ばれており、その一ノ滝にあたるのが那智大滝です。滝は3つの落口から落ちており、「三筋ノ滝」みすじとも呼ばれています。この滝の麓には「那智経塚」なちきやうづかと呼ばれる大規模な経塚が築かれ、12世紀から13世紀を中心とする多くの仏教遺物が発見されています。



那智大滝

那智原始林なちげんしりんは那智大滝の東部に広がる約32haの照葉樹林しょうようじゅりんで、古くから熊野那智大社の神域として立入りや樹木の伐採が禁止されて保存されてきた森林で、自然信仰に関連する文化的景観の典型であると言えます。樹林の高さは約25mほどで、優占種はイスノキで、ほかにツブラジイ、サカキなどがみられ、カズラなどのつる植物や豊富なシダ類が原始林の様相を色濃く残しています。

補陀洛山寺ふだらくさんじは那智大滝を下ること約6km、熊野参詣道中辺路に大辺路が合流する海岸部に位置します。熊野那智大社の主祭神の本地仏である千手観音せんじゅかんのんを本尊とし、また、古来熊野三所権現を祀る

^{はまのみや}
「浜の宮」と隣接するもので、神仏習合の信仰形態を保持しています。また小舟に乗って南方洋上の観音浄土・補陀落山を目指す僧侶により、9世紀から18世紀までの間に20数回の^{ふだらくとかい}「補陀落渡海」の宗教的行事が行われたことで有名な寺院です。なお、寺の裏山一帯には築城年代は定かではないが、^{かつやま}勝山城という大規模な城館跡が存在し、天正9年（1581）に堀内氏によって滅ぼされた那智山の有力社家潮崎氏の居城だといわれています。



補陀落山寺

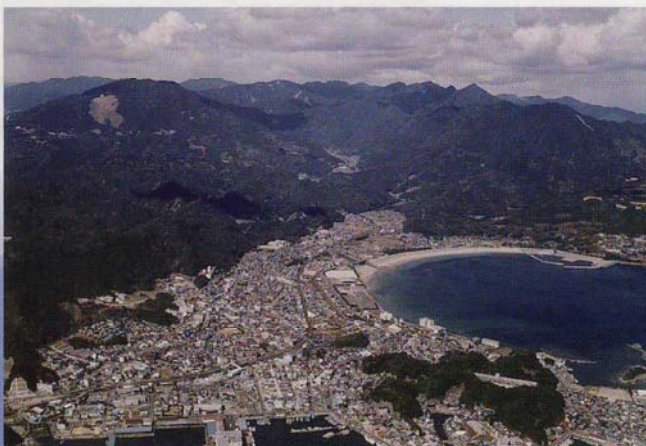
八咫鳥 (やたがらす、やたのからす)



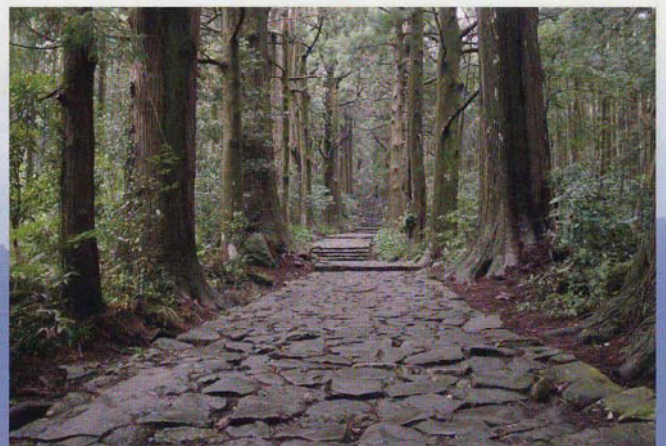
八咫鳥は日本神話の中で、^{じんむてんのう}神武天皇が東征した時に、タカミムスビの神によって神武天皇の元につかわされ、熊野国から大和国への道案内をしたとされる三本足のカラスです。熊野三山ではカラスはミサキ神（神の使い）として信仰されており、神話に登場する八咫鳥は単なるカラスではなく太陽神を意味する神聖なものと考えられています。様々な約束ごとの証明書として使われてきた熊野三山の^{ごおうほういん}「牛王宝印」にはカラスが描かれています。^{あた}咫は長さの単位で、一説では、親指と人差し指を広げた長さ（約18cm）といわれます。八咫鳥は咫が八個分の大きさのカラスという意味です。

八咫鳥の三本足については、いくつかの説が言われており、熊野地方で中世に勢力を誇った「宇井」「鈴木」「榎本」の熊野三党を表しているという説や本宮大社主祭神である^{けつみみこのおおかみ}家津美御子大神の御神徳「智」「仁」「勇」の三徳であるという説、「天」「地」「人」を表したものとも言われています。ギリシャ神話の星座絵の中に三本足のカラスがあり、朝鮮半島の^{こうくり}高句麗の古墳の壁画にも三本足のカラスが描かれています。

八咫鳥は日本サッカー協会のシンボルマークにも用いられ、これは日本に初めて近代サッカーを紹介した中村覚之助氏が和歌山県那智勝浦町出身で、その縁で、熊野那智大社の八咫鳥をデザインしたものといわれています。



那智湾



大門坂



しほんちゃくしょくなちさんけいまだら
紙本著色那智参詣曼荼羅

熊野信仰は中世から近世初めにかけて、先達^{せんだつ}などと呼ばれた熊野比丘^{びく}や比丘尼^{びくに}によって全国に広がっていきました。彼らが布教のための絵説きの道具として使用したのが、このような絵画でした。人の多く集まる場所でこのような絵をつるして見せ、信仰を広めたり参詣をすすめたりしたのです。図柄はたくさんの参詣者でにぎわう那智山の景観に、時代をこえた熊野信仰のさまざまな要素を加えて描かれています。

上端に日輪・月輪、五社殿、八神殿、三重塔、観音堂、社前における後鳥羽上皇のお経供養^{きょうく}、右上には上部が三筋に分かれた那智大滝、滝壺付近では修行中の文覚上人^{もんかくしやうにん}が不動明王に救われたという御滝信仰にまつわる靈験、下方には浜の宮と補陀洛山寺、下端の海中には補陀落渡海の光景など、那智山周辺の様子が具体的にあますところなく描かれています。このようにこの曼荼羅図の画面には那智山の信仰の歴史と霊場としてのにぎわいがうまく盛り込まれており、興味深いものとなっています。（熊野那智大社蔵 写真提供：和歌山県立博物館）